江戸切子職人：山田真照氏 作

ちゃんこ巴潟新聞

平成27年3月1日(日)
発行　ちゃんこ巴潟
東京都墨田区両国2-17-6
TEL 03-3632-5600
第13号

江戸の伝統を受け継ぐ 切子職人を訪ねて

ちゃんこ巴潟が店を構える墨田区は、2012年に開業した「東京スカイツリー」が東京の新たなシンボルとなり、多くの観光客で賑わうようになりました。一方で、下町情緒あふれる商店街や街並み、そして夏には御神輿を担いでお祭りを楽しむなどの伝統行事が盛んな人情味豊かな街です。

新旧の文化が混じりあう墨田区をはじめとした下町には、木目込み人形や市松人形など多くの伝統工芸が受け継がれています。その一つが「江戸切子」です。ガラスを細やかにカッティングし、さまざまな模様を付けた江戸切子に表れる精緻な職人の技術は、国内外を問わず、高い評価を得ています。

その江戸切子の歴史を辿ると、江戸時代末期の天保5（1834）年に、江戸大伝馬町のビードロ屋、加賀屋久兵衛がガラスの表面を彫刻し、模様を施したことが始まりと言われています。その後、江戸・東京を襲った幾度の災害や時代の流れに影響を受けながらも、庶民や職人の手によってその技術は途絶えることなく守られてきました。

江戸切子の楽しみ方は様々あります。たとえば、細やかにカッティングされた模様がライトに照らされたときのキラキラとした輝き。テーブルに映し出された光と影。手にしたときのカット面の感触。見事に磨き上げられた切子で杯を傾けると一層味わい深くなります。

そこで、今回江戸切子職人の山田真照さんを訪ねてきました。同じ墨田の地で江戸文化を受け継ぐ山田さんは「玻璃匠（はりしょう） 山田硝子」の三代目。精巧なカッティング技術とデザイン性の高さが山田さんの作品の特徴です。実は、巴潟オリジナル切子グラスの制作を山田さんにお願いしているところです。その山田さんに江戸切子に対する熱い思いを語っていただきました。

巴潟　女将　工藤みよ子

http://www.tomoegata.com

ちゃんこ巴潟
ご予約お問合せ ☎ 03-3632-5600
FAX 03-3635-3056
〒130-0026 東京都墨田区両国2-17-6
全300席　本館130席　新館170席
営業時間
平　日 11時半～14時　17時　～22時
土・日・祝日 11時半～14時　16時半～22時

旨し酒ここにあり
純米大吟醸「鳥海山」
創業以来130余年。最高のものを目指し、年月に培われた伝統と、麓峰・鳥海山の伏流水から造り出される芳醇な香りとやわらかな味わいの美酒をご賞味ください。
新入荷！
巴潟オリジナル「江戸切子」

下町両国 春～初夏がおもしろい!!

今、両国から目が離せません。春～初夏のワクワク感・ウキウキ感満載の両国を楽しんでください。

両国にぎわい祭りに行こう 5月2日(土)・3日(日)

ちゃんことといえば、両国！
本格ちゃんこの食べ比べイベント
「ちゃんこミュージアム」

巴潟も出店します

墨田の人気ゆるキャラも応援にかけつけます。

にぎわい祭り

その他、墨田区太鼓連盟による太鼓揃い打ちやダンスなどのステージショー。地元企業や地域産業の物販コーナー、フリーマーケットなど楽しいイベントがたくさんの二日間。各会場をまわるスタンプラリーに参加すると、素敵な景品ももらえます。ぜひ、ご来場ください。

大相撲 五月場所

5月10日(日)～24日(日)

江戸東京博物館

2015年3月28日(土)～5月17日(日)

戦国時代を生き抜き、265年にも及ぶ「太平の世」の礎を築き上げた徳川家康。家康の没後400年を記念して開催。見応えのある展示をお見逃しなく。

関ヶ原戦陣図屏風 右隻　福岡市博物館蔵

重要文化財
徳川家康所用
伊予礼黒糸威胴丸具足
久能山東照宮蔵

家族や大切な人と楽しいひとときを

本場両国 巴潟のちゃんこ通販

心も身体もあったまるちゃんこを囲むと、自然と笑顔があふれてきます。
巴潟の「ちゃんこ鍋」をご家族でもお楽しみください。

通常価格（税・送料込）
2人前：3,940円
4人前：6,200円

相撲文化を肌で体感

相撲甚句を満喫！ 無料

月に2回（19:00～20:00）開催

本館1階と新館2階にて毎月2回
数々の実績がある大納川 憲治氏による
迫力の歌声をお楽しみいただけます
※詳しいスケジュールはHPをご覧ください

大納川流 大納川相撲甚句会
総師範
大納川 憲治氏

広島県吉田町出身で木瀬部屋所属の元大相撲力士。
現在は全国大納川相撲甚句会の総師範として数々のレコードを出されています。

江戸切子職人山田真照氏が語る切子への思い

「江戸切子」と「花切子」を手掛ける玻璃匠 山田硝子

そもそも江戸切子とは、ガラスの表面にいろいろな模様を削り、矢来や菊などの伝統的な紋様を施したカットガラスを指します。昔はガラスに砂を付け鉄の棒で磨いたり、金盤や砥石を使って削ったりしていましたが、現在では、工業用のダイヤモンド刃を用い、より繊細な模様を施せるようになりました。

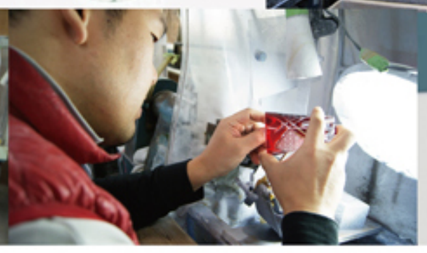
山田硝子は、祖父の時代に立ち上げたので、大正時代には創業していたと思います。

私の工房では、線状でデザインする江戸切子の他に、「花切子」も制作しています。花切子とはその名の通り、梅や桜、菖蒲などの季節の花や、馬、うさぎなどの動物を、ガラスの表面に薄く削って表現した切子ガラスです。

花切子は、正確で高い描写力が必要となります。これは江戸切子とは異なる技術なので、切子職人であれば誰でもできるわけではありません。江戸切子と花切子の両方を手掛けている工房は少ないですね。

家が工房を兼ねており、小さい頃は工房が私の遊び場でした。私が透明なガラスにマジックで描いた絵や模様を、父がその模様通りに削ってくれたのがとても嬉しかったのを覚えています。

私自身は、もともと家業を継ごうと思っていませんでしたが、高校生だったある日のこと、「お小遣いやるから手伝わないか」と言われたことがきっかけで、仕事を手伝うようになったんです。振り返れば、お金に釣られてということでしたね（笑）。



一人前になるには十年かかる厳しい職人の世界

工房によって作り方は異なりますが、私のところでは大きく分けて次の工程で仕上げます。まずは、「割り出し」。江戸切子は下絵を描かず、決めた点に線をつないで模様を描くので、目安となる縦横の点を決める割り出しはとても大事な工程です。次に「粗摺り」。割り出し線を元に、ガラスを削り、大まかなデザインを決めていきます。回転するダイヤモンドホイールにガラスを当て、デザインによって幅や深さ、形など様々な種類の刃を使い分けて削っていきます。

その後、より細かいカットを施します。最終的なカットの模様はこの工程で決まるので、デザインを思い描きながら削らなければなりません。この段階ではカット面は半透明で、ザラザラとしています。最後に、木盤や樹脂系のパッドなどを使ってカット面に光沢を出す「磨き」、フェルトや綿などの繊維の回転盤を使って磨く「バフ掛け」を経て仕上げます。江戸切子ならではの美しいカット面にするため、最後の最後までていねいに磨き上げていきます。

私の場合、はじめに「粗摺り」を任されました。3年目には一通りの工程をやらせてもらえるようになりましたが、細やかなカットや磨きの技を習得するまでには十年は必要でした。とくに難しいのは、斜めに入れるカットです。これには手の回転が必要になります。手加減一つでデザインが変わってしまうので、どこの頂点をつなぐかを考えて微調整するのに気を遣いますね。

切子の世界をもっと身近にさまざまなコラボレーションを思案中

職人人生の中でターニングポイントは、東京カットグラス工業協同組合青年部に入会したことです。毎年開催される青年部の展示会に作品を出展することで、技術の向上や新しいデザインの着想など技を極める機会をいただいています。また、小学校での体験教室や実演販売もあり、江戸切子をより広く知っていただくための活動も行っています。

墨田区伝統工芸保存会に入ったことも大きな影響を受けました。墨田区には、江戸切子の他にもさまざまな伝統工芸が受け継がれています。異業種の職人との交流はとても刺激的で、新しいデザインや創作のヒントにあふれています。

平成18年に、優れた技術を持ち、すみだの産業を支える職人たちに与えられる「すみだマイスター」に認定されたことは、職人として自信と自負になっています。

今後は、技やデザインをさらに追求しつつ、ピアスやネックレスなどグラス以外にも江戸切子の可能性を広げていきたいと思っています。他にも墨田区伝統工芸保存会の二代目、三代目の若者衆が集まって新しいコラボレーション商品を練っています。いま制作しているのは、切子を施した帯留めや、コースターなどです。もっと身近に切子を楽しんでいただきたいですね。

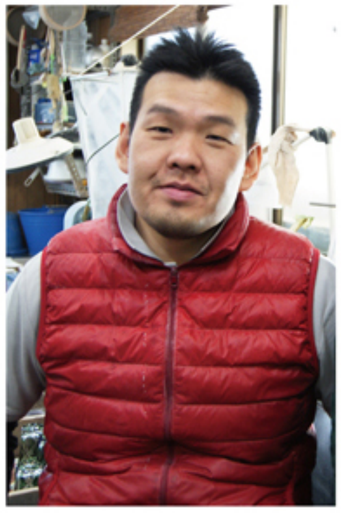
対談 山田硝子特製！巴汚オリジナル切子グラスを作ります

女将工藤（以下、K）：先日、墨田区銘品店会の会員様よりご紹介をいただきました。そのご縁で巴汚オリジナル切子グラスを作りたいというお願いに快くお引き受けいただき、ありがとうございます。

山田さん（以下、Y）：いえいえ。私もお話をいただき嬉しい限りです。私も巴汚さんで食事をさせていただいたことがありますが、繊細なスープを味わい、ちゃんこってこんなに美味しいのか、と衝撃を受けましたね。巴汚さんのためにも、良いものを作りたいと思っています。

K：もともと私は江戸切子が好きで、個人的に集めているんです。巴汚でも、冷酒の季節には切子でお酒を提供したいなあ、巴汚オリジナル切子があったら良いなあ…と思っていたのです。

Y：そうだったんですね。切子は、藍や紅、紫色が人気です。ぐい呑みはいろいろなデザインがありますが、巴汚さんの紋を入れるなら、線が際立つようなデザインが良いのではないでしょうか。



K：私もその方がいいと思います。グラスの底にカットされた模様も素敵ですね。

Y：底を削るのは、明かり取りのためでもありますが、上から覗いていただいた時に、底の模様が万華鏡のように映り込みます。側面のカットも見ていただきたいのですが、底にも注目していただきたいですね。

K：巴汚オリジナルグラスが出来上がるのがとっても楽しみです。取材の中で、「花切子」の模様付けを少しだけ体験させていただきましたが、本当に難しかったです。山田さんがいとも簡単に桜の模様を描き出し、さらに花弁の先の繊細な部分まで表現され、びっくりしました。本当にすばらしい職人技だと思います。同じ墨田区内で、日本の伝統を受け継いでいく者同士、これからもがんばりましょう。